

一日花

我が家の猫の額ほどの庭にも、毎年秋になると芙蓉が美しい花をつけます。紅色の大輪の花は、他を圧倒するような存在感がありますが、先を急ぐようにしてしぼんでいきます。

芙蓉は中国ではもともと「蓮の花」のことを指し、水の中に咲くものを水芙蓉、木に咲くものを木芙蓉と呼ぶのだそうです。

日本では、蓮を芙蓉と呼ぶ習慣はありませんから、芙蓉といえば木芙蓉のことを意味しています。そして、朝に咲き、夕方には萎んでしまうはかなさ故に「一日花」とも呼ばれています。

この木芙蓉は、早朝に開花したときには淡紅色だったものが、夕方になるに従って次第に濃くなっていきますが、中には、朝のうちは純白、午後には淡い紅色、夕方から夜にかけては紅色になるものがあり、これを酔芙蓉といいます。酒を飲むと顔色がだんだんと赤みを帯びるのに似ているところからこの名がついたといわれています。洒落ていますね。

木芙蓉も酔芙蓉も、花が短命な事に変わりなく、はかなさの中に諸行無常を感じる人も多いのではないかと思います。

芙蓉の花は、活動的だった夏への名残惜しさと、本格的な秋の深まりを感じさせます。私にとって紅色の花は、これからは冬に向かって少しずつ準備を始めなければと、重い腰を上げる合図でもあります。

芙蓉はまた、多くの俳人の魂をもくすぐるようです。

「枝ぶりの 日ごとにかはる 芙蓉かな」という松尾芭蕉の句や、

「一輪の 芙蓉に秋を とどめたり」という高浜虚子の句をはじめ、多くの俳人が芙蓉を詠んでいます。

私には、残念ながら一句も捻り出すことはできませんが、最近、こういう句に出会いました。これは、坂間晴子さんとおっしゃる方の

「芙蓉閉づ をんなにはすぐ 五時が来て」という句です。

今頃の季節は、5時というところかなり薄暗くなっています。ついこの間まで、6時過ぎまで明るかったのに、つるべ落としに日が短くなっていきます。この句は、そうした季節の移ろいと共に、芙蓉を女性の美しさにたとえ、そのはかなさを詠ったものだと思います。とはいえ、5時というのは完全に日が落ちていくわけではありません。日が落ちるまでには、まだまだ時間があります。

この句には5時を迎える事を悲しんでいるふうには感じられません。むしろ開き直っているのでしょうか。私などは、しっかりと自分を見つめている、女のしたたかな力強さを感じてしまいます。(塾頭 吉田 洋一)